

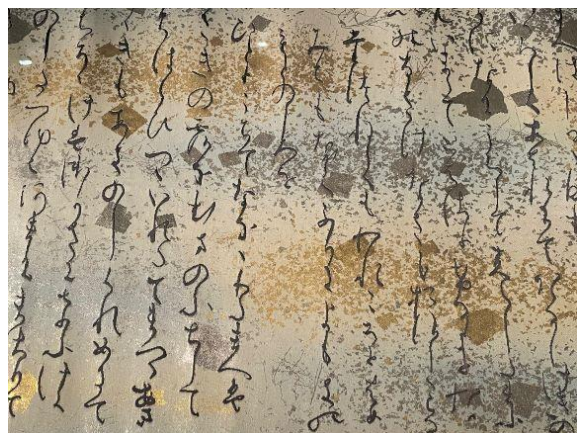
217 平安時代の国風文化（2023 年 12 月 5 日）

以前にギメ東洋美術館が所蔵する西陣織の源氏物語絵巻をご紹介します。長さが、それぞれ8メートルから12メートルある四巻の織物で構成される作品です（写真右）。これは、西陣織の発展に生涯を捧げた山口伊太郎氏（1901-2007）が、70歳から35年かけて制作したものです。山口氏から寄贈を受けたギメ東洋美術館が所蔵するものと山口氏のご家族が所有するものと2セットしか存在しない貴重な作品です。



この織物は、2021年初めにリヨン織物美術館で展示される予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大により、フランスでは美術館や博物館が閉館したため、展覧会の延期を余儀なくされました。そして、ついに11月22日からギメ東洋美術館でこの作品を展示する展覧会「千年読み継がれる光源氏をめぐる物語」展が始まりました（2024年3月25日まで）。この展覧会では、源氏物語絵巻の織物と合わせて、源氏物語が誕生した平安時代の文化を紹介し、源氏物語を題材にした漆器や浮世絵を展示しています。

平安時代とは、8世紀末から12世紀末までの約400年間を指します。日本は、7世紀から隋や唐に使節を派遣し、留学生が、当時の最新の技術、社会制度や仏教を中国で学んで、日本に持ち帰りました。しかし、次第に中国の影響が強い文化から、日本の風土や生活に合った文化が好まれるようになり、国風文化と呼ばれる貴族文化が発展しました。中国の漢字から日本独自のかな文字（平仮名と片仮名）が誕生し、物語、日記や随筆などの数多くの文学作品が生まれました（写真右は、展示されている西陣織の源氏物語絵巻の中で、平仮名を多く使った文章の部分の拡大。）。日本の風景を描いた優美な大和絵が描かれ、文学と絵画を合わせた絵巻物が誕生したのもこの時代です。建築では、貴族の住宅は、高温多湿な日本の風土に合った寝殿造という様式で作られるようになりました。



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

この時代の特徴の一つとして、女性の活躍が挙げられます。国風文化が栄えた10世紀初めから11世紀は、天皇制の下で藤原氏が絶大な権力を握っていました。藤原氏は、娘を天皇の后（きさき）として入内させ、娘が産んだ男子を天皇に据え、摂政や関白という要職に就いて実質的に政治を支配しました。藤原氏の娘たちには、天皇の后に相応しい和歌や学問教養を身につけるために、優秀な女房が仕えていました。「源氏物語」の作者である紫式部は、そうした女房の一人で、藤原道長の娘で一条天皇の中宮となった藤原彰子に仕えていました。紫式部の「源氏物語」と並んでこの時代を代表する文学作品に随筆の「枕草子」があり、作者は清少納言です。清少納言は、道長の兄の藤原道隆の娘で、彰子よりも先に一条天皇の中宮となった藤原定子の女房でした。

色鮮やかな何色もの絹糸と金やプラチナを使った糸で繊細に織られた西陣織の源氏物語絵巻は、ただでその鮮やかな色彩と巧みな技に圧倒されます。紙の絵巻物（写真左下）と比べると、西陣織の絵巻物（写真右下）の鮮やかさは一目瞭然です。「源氏物語」や絵巻物が作られた時代背景を知ると、織物の美しさに加えて織物に描かれた場面に関心が湧き、さらに展覧会の鑑賞が興味深いものになるのではないかと思います。

